運動が苦手な子どもの体育の授業における居場所感の重要性

花村春香（筑波大学）

１．目的

本研究では、体育の授業における運動が苦手な子どもの居場所感が体育の授業の印象に及ぼす影響について明らかにすることを目的とした。

２．研究方法

原田ら（2013）と石本（2010）を参考に体育の授業における居場所感に関する項目を選定し、質問紙（４件法）を作成した。

１）対象者：A 県にある公立中等教育学校の 1〜3 年生（445 名）

２）調査期間：令和 3 年 9 月下旬から 10 月上旬

３）分析方法：プロマックス回転に依拠した因子分析と二元配置分散分析を行い、「体育の授業の印象」に「居場所感の各因子」と「運動の苦手さ」が及ぼす影響を分析した。

３．結果と考察

因子分析の結果、居場所感の因子として「受容感」（クローンバックのα係数=.96）と「本来感」（α=.92）、「自己有用感」（α=.94）が抽出された。

１）運動の苦手さと受容感の二元配置分散分析

生徒の「体育の授業の印象の良さ」の得点に対して「運動の苦手さ」（F(1, 412) = 70.48、p<.05）と「受容感」（F(1, 412) = 71.90、p<.05）の主効果が確認され、運動が苦手な群、運動が苦手でない群の両群において、受容感が高い方が体育の印象が良いことが明らかになった（図１）。

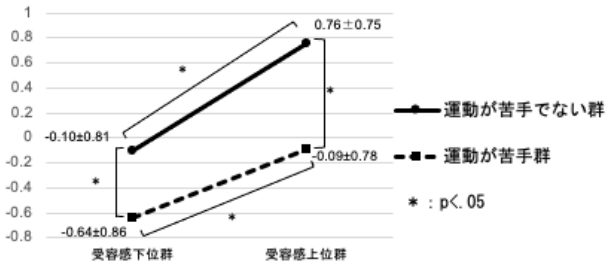

図１「運動の苦手さ」と「受容感」を要因としたときの「体育の授業の印象の良さ」の因子得点差

一方で、「運動が苦手かつ受容感上位群」と「運動が苦手でないかつ受容感下位群」の間に、体育の授業の印象において差があるとは言えなかった。

２）運動の苦手さと本来感の二元配置分散分析

「体育の授業の印象の良さ」に対して「運動の苦手さ」（F(1, 412) = 67.61、p<.05）と「本来感」（F(1, 412) = 46.94、p<.05）の主効果が確認され、運動が苦手な群、運動が苦手でない群の両群において、本来感が高い方が体育の印象が良いことが明らかになった。一方で、「運動が苦手かつ本来感上位群」と「運動が苦手でないかつ本来感下位群」の間に、体育の授業の印象において差があるとは言えなかった。

３）運動の苦手さと自己有用感の二元配置分散分析

体育の授業の印象の良さ」に対して「運動の苦手さ」（F(1, 412) = 58.68、p<.05）と「自己有用感」（F(1, 412) = 28.99、p<.05）の主効果が確認され、運動が苦手な群、運動が苦手でない群の両群において、自己有用感が高い方が体育の印象が良いことが明らかになった。一方で、「運動が苦手かつ自己有用感上位群」と「運動が苦手でないかつ自己有用感下位群」の間に、体育の授業の印象において差があるとは言えなかった。

１）〜３）の結果から、子どもの運動の苦手さに関わらず、体育の授業において居場所を感じられることは重要であると考えられた。また、運動が苦手な子どもにおいては、運動の苦手さを軽減することに加え、体育の授業における居場所感を高めていく必要性が示唆された。

４．主な参考文献（MS ゴシック 10.5 ポイント）

１）原田克巳・滝脇裕哉（2013）居場所概念の再構成と居場所尺度の作成，金沢大学人間社会学域学校教育学類紀要，6：119-134.

２）石本雄真（2010）青年期の居場所感が心理的適応，学校適応に与える影響，発達心理学研究，21（3）：278-286.